

選外佳作

病院に働いた人農の人しりとあそびで分かつてしまふ

(一六) 山口 森田アヤ子

黒髪を束ねピッチを駆け抜ける女性主審はつよく笛吹く

(五〇) 東京 野上 卓

ひとりゐて愛、哀、あいと呟きぬ戦争つづく外国とくこく思ひて

(五九) 広島 下垣内和子

四十億年を表す地層あらかわの映像よ指は折り鶴折りつつ眺む

(八八) 広島 新井 邦子

佐野井出の堰の切られて来る水は田植え始めの触れ太鼓なり

(九〇) 山口 余園 岡子

泣くことを忘れたように海に向く母へ松ぼくり拾いしを見す

(一一八) 広島 若林美知恵

半夏雨はしやぐ葉叢に無花果の肩寄せあへる実のあまたあり

(一三五) 愛媛 合田 椿象

夏の陽に千羽の折鶴ふくらみてビルの片隅被爆地蔵は

(一四二) 広島 森本 直美

あの夏を知つてゐる鳩が一羽くらい居るかも知れぬ原爆ドームに

(一五二) 山口

石井久美子

白勝ての声に押されてグラウンドを駆けゆく荊子りこのおさがが揺れる

(一六三) 広島

井上 愛

新しき譜面配られコーラスの音取りピアノ薫風に乗る

(一七〇) 山口

吉田 房枝

広げられた本は飛びゆく翼のかたち 大きな図鑑を楽しむ幼

(一八四) 千葉

小田 優子

大輪の重きにかたむくカサブランカ湿り気の無き畑にかおる

(二二三) 島根

宮里 勝子

ことばとは水のようなり本棚にぎつしりとある水吾は川だった

(二二六) 広島

山田 典彦

これと言ふ自慢の出来る事は無くも高齢者の歯で表彰受けぬ

(二三九) 岐阜

大野久美子

身をつつむアルミシートを透きぬけてわたしに溶ける阿智の群星

(二七七) 神奈川

大平真理子

母の字に草冠付けば苺なり母子は共に大粒を食む

(三〇八) 京都

近藤 好廣

明日の身の行方は知れずそれはそれチューリップの球根埋めております

(三二四) 山口

二宮 信子

家庭での流行りはや廃りすたのアイスのごと新党乱立移ろいやすき世

(三四九) 香川

好井 晶子

老いゆける母の憂ひによく効く田頭茶舗のパフェのひと匙

(三五七) 広島

村上 直子

八人の子を育てたる我が母の洗ひし御襦袢の数を思へり

(三六七) 広島

小坂 修

檸檬樹をこぼれた花がまだ白き土をたがやす憲法記念日

(三七〇) 福岡

中村 仁彦

楽しみを共に過ごせる友のでき好きになりたりひとりの暮らし

(三八〇) 山口

田原美代子

保護者です、診察室につき来たる夫と子と聞く癌のステージ

(三九二) 滋賀

嶋寺 洋子

七十まり二つを生きてななて撓々とわがつきし嘘吾につきし嘘

(四三九) 山口

長尾 健彦

ルノアールの絵と紛ふかの美少女は斜めの席にピザを食みをり

(四四四) 東京

高山三枝子

高齢化社会の先の多死社会孤独死枯渇死餓死尊厳死

(四六七) 埼玉

高田 明洋

つる延ばし行き先探るゴーヤーに一つ雄花が 今日沖繩慰霊おくれいの日

(五一九) 広島

寺田 孝子

ただ一人の卒業生の名を呼ぶと「はい」と大きな声のソプラノ

(五五七) 北海道

藤林 正則

捲りたる三十余年の家計簿に医療費ゼロの月多くあり

(五六九) 広島

上田千津子